

韓国ムン・ジェイン（文在寅）大統領の立場

韓国の大統領が、ドナルド・トランプさんとの会食に慰安婦の人を同席させました。このことが日本人にしてみると許せないことに感じられるはずです。とりわけ北朝鮮の軍事的挑発の状況下で、本来日・米・韓が一体となって北朝鮮と対峙するべきなのに、このような行為をすることは、ひどく的外れなことである、と感じておられる方が多いと思います。

しかし私にはムン・ジェインさんの考えが良くわかります。

- ①それはそもそも韓国と北朝鮮は同じ国であること、したがって日本とは異なって、韓国人のかなりの人々が、北朝鮮と仲良くしたいという、深いつながりというか深層心理があるから、北朝鮮を単に悪徳国家としてとらえたくないという気持ちがあること。
- ②次に現在の日本の安倍総理は、明治政府以来の帝国主義を代表する伊藤博文や戦犯の岸信介の直系であり、その安倍総理が多数の支持を得ている日本は、また戦前と同様の侵略行為をするのではないかと恐れているのだと思います。そのようなことにならないように、今の右翼化した日本や安倍総理の政府は絶対に受け入れられないと考えて、あえて嫌がらせをしているのだと思います。
- ③日本の軍国主義の被害者は韓国や中国だけではなく、真珠湾攻撃を受けたアメリカも同様であり、韓国から見れば、アメリカも韓国及び北朝鮮も歴史的には同じ立場であり、そのような背景からドナルド・トランプさんは、韓国の主張を受け入れてくれるはずである、という考えから今回のムン・ジェイン大統領はこのような行動をしたように解するべきではないでしょうか。数日前にドナルド・トランプさんが「リメンバー・パールハーバー」という言葉を口にした時、このムン・ジェインさんの意向を受け入れていたのだと思います。
- ④さらに日米の貿易赤字を解消するのがドナルド・トランプさんの当選の大義である以上、ドナルド・トランプさんは日本との関係を良好にする必要もないと考えているから、安倍総理の、仲良くしたいという意向にもかかわらず、ドナルド・トランプさんは日本に対して特に深い考えを持っているわけではないと考えるべきでしょう。哀れなのは、その気がないドナルド・トランプさんに気に入られようとすり寄る安倍総理の姿でしょう。
- ⑤ドナルド・トランプさんにとっては、日本は兵器やその他の商品を買ってくれば良いだけで、それだけで対日外交の目的は達せられたと考えているはずです。そのことで彼が対峙しているアメリカ軍事エスタブリッシュメントのご機嫌を取ることができるわけですから。
- ⑥ドナルド・トランプさんは商売人であり、人類の長い歴史から見ても、商売人は平和主義者であることが多く、彼は戦争を望んではいないと考えるべきでしょう。ロシア疑惑はロシアと仲良くしたいだけの話であり、ロシアと仲良くなってもらっては困る、6大メディアを含むアメリカの軍需エスタブリッシュメントが彼をつぶそうとしているにすぎません。中国の関係にしてもそうです。彼は大声で北朝鮮を脅していますが、戦争をしないように、彼なりに努力しているのだと解するべきでしょう。
- ⑦志成館の「館長の社会論サイト」にも記述していますように、ドナルド・トランプさんを支えるペンタゴンも、アメリカの多くの兵士が、アメリカの強欲な軍事産業によって命を落としたことに怒りを感じて、これらと縁を切って「誇り高い軍事国家を再構築しようとしているのである」という視点から見れば、ドナルド・トランプさんはもしかしたら世界平和の実現に貢献できる大統領になるかもしれません。軍事的行動に関して大ぼらを吹いている印象は免れませんし、予断は許しませんが、今でもまだ私はドナルド・トランプさんの平和主義的な側面に期待をしています。それを妨害しているのが国務省であることも別掲の通りです。
- ⑧以上の文脈の一部は船瀬俊介氏の立論に依拠しています。

2017年11月8日(水)

ようやく登場した「立憲民主党」というまともな政党

いろいろなところで述べていますように、私は「先生」という立場上、いろいろな面で「中立」であり続けようと努力しています。宗教的にも政教分離という近代国家の前提を受け入れて「無神論者」という立場を貫き、それぞれの宗教の利点も、宗教そのものを信じないことの利点も把握し説明しています。しかしい何かが「中立」なのかは各人がそのよって立つ思想基盤によって評価が分かれます。その観点から、宗教的な偏向や思想的な偏向が許されない「大学教授」という学問のプロをととても尊敬しています。上述の「世界」の紹介をしたのは、このような本こそが真の意味での「中立的な本」と解することが出来るからなのです。その判断の根底には、今日までの人類の歴史と今日における世界各国の政治経済的の仕組みがあります。そしてこの「館長の社会論」も、志成館の教え子だけでなく、多くの方々に、「**真実を知る方法**」を提供しているつもりなのです。まだ差別や偏見が多かった50年前の私個人の学生時代からの信念に基づいて、「この国に真の民主主義が広まるように努力し続ける」ことを自分のライフワークにしてきました。私は弁護士という仕事にはつけませんでした、その夢を仕事や人々との触れ合いを通じて自分なりの努力はし続けてきたつもりです。

このような私にとって一つの嬉しいことがこの国におこりました。それは「やっとまともな政党がこの国に出来た」ということです。先日の10月22日の選挙で立憲民主党が55議席獲得しましたが、枝野さんや長妻さんの意見をテレビで見ていると、自分とほぼ同じことを話してくれるので、安心し、満足し、うれしさを禁じ得ないのです。今後はこの政党のもとで、現在の憲法を守ろうという人たちが増え続け、この国は良い方向に向かっていくものと期待しています。

「中立」と言いながら「立憲民主党を支持するようなことを言うとはけしからん馬鹿者だ」と反応される方がいるかもしれません。しかし**立憲民主党は保守でも革新でもありません。右翼でも左翼でもありません。**ただ単にこれまでの歴史を反省したうえで、**憲法を重視した立憲主義という近代国家の原則を守り、同時に自分たちの力でよりよい社会をつくっていこうという民主主義を実現していこうという政党であるにすぎません。**ですから近代国家の原則を守ろうという意味でのきわめて当たり前のそして「まっとうな」政党であるにすぎません。

これまでの政治は一方では相続法で保護された伝統的な富裕層や権力者そして企業努力を重ねてその地位を築いてきた富と権力を備えた企業の経営者の意向に沿って運営され、他方では富も権力も地位も持たないごく普通の人たちの政治への関与と富の分配の公平さを求める叫びや抵抗という形で運営されてきました。立憲民主党はこのいずれの主張も認めたとうえで、最高法規である日本国憲法を守り、国民一人一人が平等に主役となって、よりよい政治よりよい日本をつくろうと動き始めたものであり、既得の利権を考え直し、公的機関の情報の隠蔽やメディアの自由で公平な活動を求め、すべての国民つまり有産者や無産者、男女の差、肌の色や言葉や宗教の違いを超えて、話し合いによって民主主義的に、つまり国民一人一人が政治にかかわることでよりよい日本をつくりましょうという政党であるにすぎません。ですからこれからは国民の一人一人がまじめに政治を考えることが出来る政党が誕生したという意味で、私は安どの気持ちを抱いているのです。そして立憲民主党はこの点から保守でも革新でもなく、右翼でも左翼でもないと言えるのです。

2017年10月30日